談話室

# 「常識」「知識」「情報」の怪しさ・危うさ

帰宅途中にときどき八重洲ブックセンターに寄ることがある。最近の新書版のベストセラーは，１位『バカの壁』養老孟司著，２位『エコノミストは信用できるか』東谷暁著となっている。すでに多くの読者を得ているので，内容はここでは省く。この２冊は題材も著者のねらいも全く異なっているが，私には共通しているテーマの一つが見えてくる。人々が言う「常識」「知識」「情報」の持つ怪しさやそれらを絶対的な真実と錯覚することの危うさである。

この２冊は決してやさしい内容の本ではない。売れ筋となっている理由の一つに，それぞれの本の表題がセンセーショナルで，つい手にしてしまうという面も否定できない。私が興味を持ったのは，そのことのほかに長い間「投資」という仕事にかかわってきたことにも一因がある。仕事中はいつも，さまざまな情報と専門家（エコノミスト，ストラテジスト，アナリスト，ファンドマネージャー等）の意見，市場のコンセンサス等々がまわりに飛び交っている。そしていつも感じるのは，ここで得られる「常識」「知識」「情報」の怪しさであり，これらを信じることの危うさである。『バカの壁』の中で「万物流転，情報不変」という章がある。情報は不変だけれども，それを受け取る人間の方が変化しているという意味で，一つの情報に対する人の反応や行動は今日と明日とでは変わるという意味にも取れる。「エコノミストは信用できるか」という表題であるが，私は信用するとか信用しないとかいう問題の捉え方には違和感がある。投資判断をするに際してエコノミストの役割は，一つの考え方を提供する道具にすぎない。それ以上でもそれ以下でもない。エコノミストに論理の一貫性を求めるのもいいが，経済学に絶対的な真理を期待しても投資は成功しない。

著名な米国の投資家ジョージ・ソロスは，投資判断において，綿密な分析，直感，とっさの決断力と合わせて，「反射理論」と呼ばれる手法を使っている。「反射理論」とは極論すれば「市場は常に間違っている」という信念を持つことである。つまり「人間は経済的な選択をする場合，合理的に行動する」や，「企業業績や経済実態を正確に知る」といったことは，あくまで理想の世界の話であり現実にはあり得ないとし

ている。ソロスは次のように言っている。「金融市場を理解するポイントは，人々の将来予測が偏見に満ちているということを理解することだ。偏見に満ちた認識は真実をも変えてしまう。客観性などというものは，砂上の楼閣にすぎない。」ソロスは金融市場の動きが，投資家の「偏見」と「事実」との相互作用の結果とみている。市場では多数が失敗し，少数が成功するというのが常である。また，市場は弱者，つまり確固たる信念を持たない投資家を完膚なきまでに叩きのめす。「知識」や「状況」の認識についてもソロスは手厳しい。「完全な知識という前提が成立するかどうか疑わしい。なぜなら自分がかかわっている状況について理解していることを，知識として認めることはできないからである。」このように考えていくとすべてが疑わしくなり，投資判断の根拠がなくなってしまうのではないかと心配になる。私はソロスの投資手法のポイントは批判的思考様式にあると思っている。「自分の思考と現実の違いを思い知らされる苦い経験を生かすこと」，「いくつかの選択肢から選んだ場合，批判的な検証という継続的な過程が伴うこと」などにその考え方が表れている。

「常識」というのは伝統的思考様式に基づくものが多い。そこは信念と現実の区分がなくなり，結果として現実からかけ離れた信念に陥る。「バカの壁」を作ってしまう。「知識」は批判的に検証されなければならない。エコノミストの発言する「知識」は，絶対的な真理と錯覚しない限りにおいて，是々非々で利用すれば良いわけで，「エコノミストを信用できるか」という問題ではない。「情報」を生かすのは受け取る側の問題である。それを収集し，加工し，発言する力（情報力）が受け取る側に求められている。情報力は批判的思考様式の中でのみ，育まれていくものと理解している。

投資の世界では，やはりソロスは天才の名にふさわしい。よく言われる彼の才能は，①シナリオへの柔軟な対応力，②剛胆さ，③揺るぎない自信，④直感の冴え，⑤世界の金融界での深い人脈などがある。一方，我々の投資は組織的に行っており，天才はいない。現代投資理論にそった分散投資の手法を採用している。投資組織全体が批判的思考様式を持ちたいと努力している。我々は少数の成功者の中の一つであることを祈っている。

**＜引用文献＞**


・『バカの壁』養老孟司著，新潮社
・『エコノミストは信用できるか』東谷暁著，文芸春秋
・『ソロスの55の言葉』青柳孝直著，総合法令出版



**（農林中央金庫専務理事　能見公一・**のうみきみかず**）**